

西会津町の歴史　－奥川編－

1. 500年続く岩屋さまの信仰

出戸村の南西に、虚空蔵菩薩・不動明王・毘沙門天の仏像3体が安置され「岩屋さま」と呼ぶ洞窟がある。

今から500年ほど前、伊勢外宮生まれの真海という修行僧が村にやってきた。村にはもう1人出羽国長井生れの伴越後という19歳になる修行僧が住んでいた。2人は、食物となる十穀を断ちながら、洞窟に籠り瞑想する厳しい修行を続ける僧であった。ちょうどその頃、上野尻には四



出戸岩屋さま祭礼

国阿波国生まれのせんぎょう筈暁という仏師がきていた。この人は、ある名僧から「適当な巖窟を見付け、そこで虚空蔵菩薩を彫って祀るように」と命じられ、全国各地を探し歩いているところであった。出戸村の岩谷で修行している真海と伴越後のことを聞き知った筈暁は、来てみれば安置するにこれほどふさわしいところはないと思い、さっそく仏像造りに取かかった。わずか2ヶ月余りで立派な虚空蔵菩薩など3体の仏像を彫りあげることができた。虚空蔵菩薩は知恵を授け、商売繁盛のご利益があるとされる仏様であり、立派にでき上がった虚空蔵様を見て、村人はたちまち深く信仰するところとなった。

ところがある冬の日こと、真海は村の法要に出かけた帰り、岩屋への急な石段で足をすべらせ、真逆さまに川へ落ちて命を落としてしまったのである。村人たちは悲しみ手厚く葬り墓をつくることとした。しかし、今ではその場所はわかっていない。

それから200年ほどたった頃、越後国横越生まれの直応という修行僧がやってきて、この岩屋に住み17年間も修行を続けていた。長く留まった僧もなく、荒れていくのを残念に思った直応は、「御堂を建てこれからもここで住もう」と決心した。直応はすでに68歳になっていた。できるだけ早い完成を思い、さっそく協力者を探し歩いた。幸いこの話を聞き、村人やほかにも援助してくれる人が現れ、つ

いに完成させることができた。喜んだ直応は御賓頭おびんづる盧様を安置し、これを祝ったのであった。延享2年(1745)のことで、祭主は中町村修験大法院であった。

出戸の岩谷様は「祈願の功德あらざることなし」といわれ、以来ますます参詣者が増え、毎年正月23日と4月13日の縁日には大勢の参詣者で賑わい、特に春の縁日には前夜からの御籠りのある賑わいであったという。今では毎年9月13日を縁日として500年近く続いてきた信仰を守り続けている。

出戸村に直応が岩屋さまに滞在しているのとはほぼ同じころ、隣の松峯村に1人の行脚僧が滞在していた。六十六部ろくじゅうろくぶひじり聖であった。名は明らかでない。村の長である矢部佐太郎は世話をするうちに、聖の厚い信仰にふれ、自らも六十六部聖となった。行脚僧と結縁し、「諸国六十六部巡礼供養塔」を建てたのである。碑には、享保6年(1721)と刻まれている。道目村にも同様の碑があり、廻国聖にとって奥川の地は何らかの靈感の感じる場所であったのかもしれない。



2. お聖天さまを拝む

極入村の中ほどにある丘の上に「お聖天^{しょうてん}さま」がある。麓に真言宗金蔵寺^{こんぞうじ}があり、寺の左側参道石段を上ったところに御堂が建つ。歡喜天社は多くの彫刻で装飾され、堂内にも様々な彫刻がみられる堂々たるものである。歡喜天社は、徳一が金蔵寺とともに大和国猿沢邊の工者水口八右衛門に造らせたものと伝えられ、歡喜天像は高寺から移したと伝える。いわゆる「高寺おろし」である。像は銅製で“象頭人身”の男女二身が抱き合う姿の、もとはインドの神である。この像は秘仏であり「見れば目がつぶれる」と伝えられ、その禁忌は固く守られ誰も目にしたことがないという。



歡喜天社

お聖天様の靈驗は、その姿から男女の和合はもとより良縁・子授け、あらゆる障害を除き裕福となる、手芸や針仕事など手仕事の上達するなど一切のご利益があるといわれ、強力である。賭けごとの必勝祈願さえありという。戦時中は、「戦死を免れる」や「弾に当たらない」などといわれ、戦勝祈願の旗を立て参詣する出征兵士や家族が多くみられた。御堂内にはこれに関する奉納品も多く飾られている。

町指定重要文化財の絵馬は、喜多方市関柴町の絵師白幡伯雅が描き、明治31年12月に奉納されたものである。堂内には会津若松市の人物が奉納した絵馬もある。信仰する人・参詣する人が遠くに及んでいたことが知れる。

しかし、熱意のない信仰に対しては容赦ない報復があるという恐ろしい神であるともいわれる。戦時中、出征兵士となった息子の無事を願い毎日のように参詣していた母親がいた。願いは叶い息子は無事に戻ることができた。しかしながら、喜びのあまりお礼の参詣を忘れてしまったのである。そのため、戻った息子は間もなく病気で亡くなってしまったという。そのような話も伝わる。

明治27年、堂宇建築のため近村に寄付を募っていることから、現在の御堂はこの時に建築されたものであろう。御堂には数多くの彫刻がみられる。向拝には、3本爪の龍・菊花・牡丹・渦巻きなびく雲があり、他の箇所には、阿吽の獅子・竹籠毬で遊ぶ3匹の猫・大根と鼠等々がみられる。彫った人は佐渡の大工であり、この

人は、近隣で多くの仕事をし、現阿賀町深戸で生涯を閉じている。

また、御堂正面にある「大聖歓喜天」の扁額は、宮城三平と親交のあった会津本郷町の書家徐晏坡^{じょあんぱ}の筆のものである。



3. 堰の開削に生涯をかけた理左衛門

(1) 矢部理左衛門の新田開発

矢部理左衛門は名を政方といい、当時大割元(後の郷頭)であった矢部彦左衛門の嫡男として、元和元年(1615)、真ヶ沢村に生まれた。幼い頃より農耕に関して興味が強く、広く事業を興すことを考えていたという。この頃の農民は困窮し逃亡離散するものが数多くみられ、田畑の荒れは頗る多かった。

寛永20年(1643)、保科正之が会津藩主として入部すると、宿望を果たすのはこの時とばかりに向原・井岡間の開墾を願い出、許された。

正保3年(1646)には弟政次に家督を譲り、この地に移り住んだ。それから困難を極める作業を続けること十余年、ついに開田に成功し吉田新田を開いたのである。その功績により郷頭職が与えられることとなった。その後も新田開発を続けるとともに失跡民を戻すことに奔走し、越後・米沢などから124人の逃亡者を復籍させたという。寛文6年(1666)まで理左衛門開墾による新田の年収高はおよそ2,233石となり、新たに開墾された堰は41、その総延長は36,750間にも及んだ。

また、困窮者に田畑を与えるなどの善行も少なくなかったという。その後郷頭職を辞し嫡子三右衛門に家督を譲り、山都三ツ山の新田開発に関わった。理左衛門による新田開発は新たな独立家族を生みだし、これによって奥川地域の村々は大きく変貌を遂げる時代となった。寛文7年(1667)8月没、享年53歳であった。

屋敷裏にある「勸業篤志碑」は、明治25年に福島県が理左衛門の業績を改めて称讃し、建設したものである。篆額は松平容保筆。山都三ツ山村にも同様の碑がある。



勸業篤志碑

(2)五ヶ村堰

奥川地区の集落の多くは、奥川兩岸の段丘面に点在している。比較的幅広い段丘の比高は、新町あたりで 20mほどとなる。こうした村では地下水を得ることは容易ではなく、飲料用井戸さえ持てない状況であり、生活用水も灌漑用水も小さな沢の水や堤に頼らざるを得なかった。しかし、これでは干ばつの年などにはなす術もなく、結局豊富で安定した水を得ることが村人の宿願であった。

こうして、奥川左岸小屋集落付近を取水口とする堰の建設計画が立ち上がったのであった。これが「五ヶ村堰」の誕生である。取水口は標高およそ 250m、そこから下流にある宮野・真ヶ沢・中町を経て、新町村中を流れ、再び奥川に放出される。新町村の標高は 210m程である。「大堰」とも呼ばれるこの堰は、延宝 7 年(1679)に書かれた『堰改め帳』には「大堰 長さ二千六百五十間 幅三尺 深さ三尺 建設年不明」と記され、地域では現在においても最大規模を誇る堰である。この堰は矢部理左衛門の開鑿した堰ではなく、それ以前の「真ヶ沢組」といわれた時代の建設と考えられる。「真ヶ沢組組頭」の家に生まれた理左衛門は、のちに多くの堰の開鑿を行っている。子どもの頃に家の前を流れる五ヶ村堰建設の様子をみて、自らの役割を心に刻んだのであろう。



4. 戊辰戦争と龍泉寺

慶応4年(1868)の越後口から入った政府軍(広島藩・新発田藩など)の兵力に押しされる会津軍は退却一方となった。会津軍は館原代官所を本拠地とし、陳ヶ峯峠や奥川口を防衛拠点として阿賀川北部の護りを固めた。奥川口では小高い場所にある龍泉寺を陣地として胸壁や砲台を築き、道を挟んだ向かい側の山に農兵を配置して挟み撃する作戦を立てていた。

9月2日早朝、肝煎らの話で敵軍がまだ来ていないことを知った砲兵隊は道目村まで進むこととした。柴崎村口から奥川へ入るには木伏峠を越えるか男山を越え下松へ出るかである。どちらにしても道目村は通過するため、道目村で新町村側と裏山杓根沢側の二手から政府軍を攻撃する作戦を立てた。しかし、砲撃したもののわずか20名前後では200名余の政府軍に対し勝ち目はなく、たちまち反撃され敗走せざるを得なかった。本隊も応援に行こうと中町村あたりまで来たが、大勢の敵を見て龍泉寺へ引き返してしまった。これをみた政府軍は龍泉寺を攻撃、中に隠れていた兵に鉄砲を放った。道目村から敗走した兵も龍泉寺に戻ろうとして斬り合いも起きている。数時間に及ぶ激しい戦いの末、夕方近くになってついに会津軍は退却を決めた。これを追う政府軍と再び小綱木村で戦いとなる。村人は官軍の鉄砲玉が飛んでくるのを恐れ急いで畳を立て隠れたという。また、会津軍の兵士1人が敵の状況を見るためサデに上がって見渡していたところを撃たれ、死亡したという。

この奥川の戦いでは会津藩士5人が戦死し、宮野村肝煎矢部政左衛門も亡くなった。龍泉寺で戦死した朱雀士中隊安藤元四郎の墓は龍泉寺墓地にあり、小綱木村墓



龍泉寺本堂柱の弾痕

地には「機山劔勇居士」とある隊士の墓もある。名前は記されていない。大正6年、小綱木村では各戸2銭の寄付金を集め、「戊辰戦死者五十年祭」を行っている。

龍泉寺本堂には数多くの弾痕のある柱数本が残されている。弾痕はすべて一方向からのものであったという。

この戦いの様子を記録した人物が梨平村にいた。その記述は次のようなものである。「九月一日まで官軍方にては、諏訪峠に陣をとり、同日にありて津川町に渡り、その夜に下野尻まで来たり。下野尻より官軍打掛柴崎村・ナギノ平にて当国人数陣をとり大合戦あり。然るに二日に至り我が奥川に来たり。当奥川にては真賀沢龍泉寺へ九月一日に寺西口へ胸壁をつき置きたるに昼九ツ頃大合戦あり。官軍は中町より相向う。また、百姓は鉄砲を持って小山墓場より向う。その合戦に当国御人数三名死す。また、その時宮野矢部政左衛門戦死仕り候。当国死人三名龍泉寺裏共有墓に埋葬」

5. 奥川軌道と歩んだ近代化への道

(1) 木材・木炭を運んだ奥川軌道

今から 100 年ほど前の大正時代初め、奥川に 2 つの近代化を象徴する出来事があった。1 つは水力発電所の建設であり、もう 1 つが徳沢・弥平四郎間の軌道＝トロッコ道建設である。奥川地域にとって「明るい未来が見えた」と思われる出来事であった。

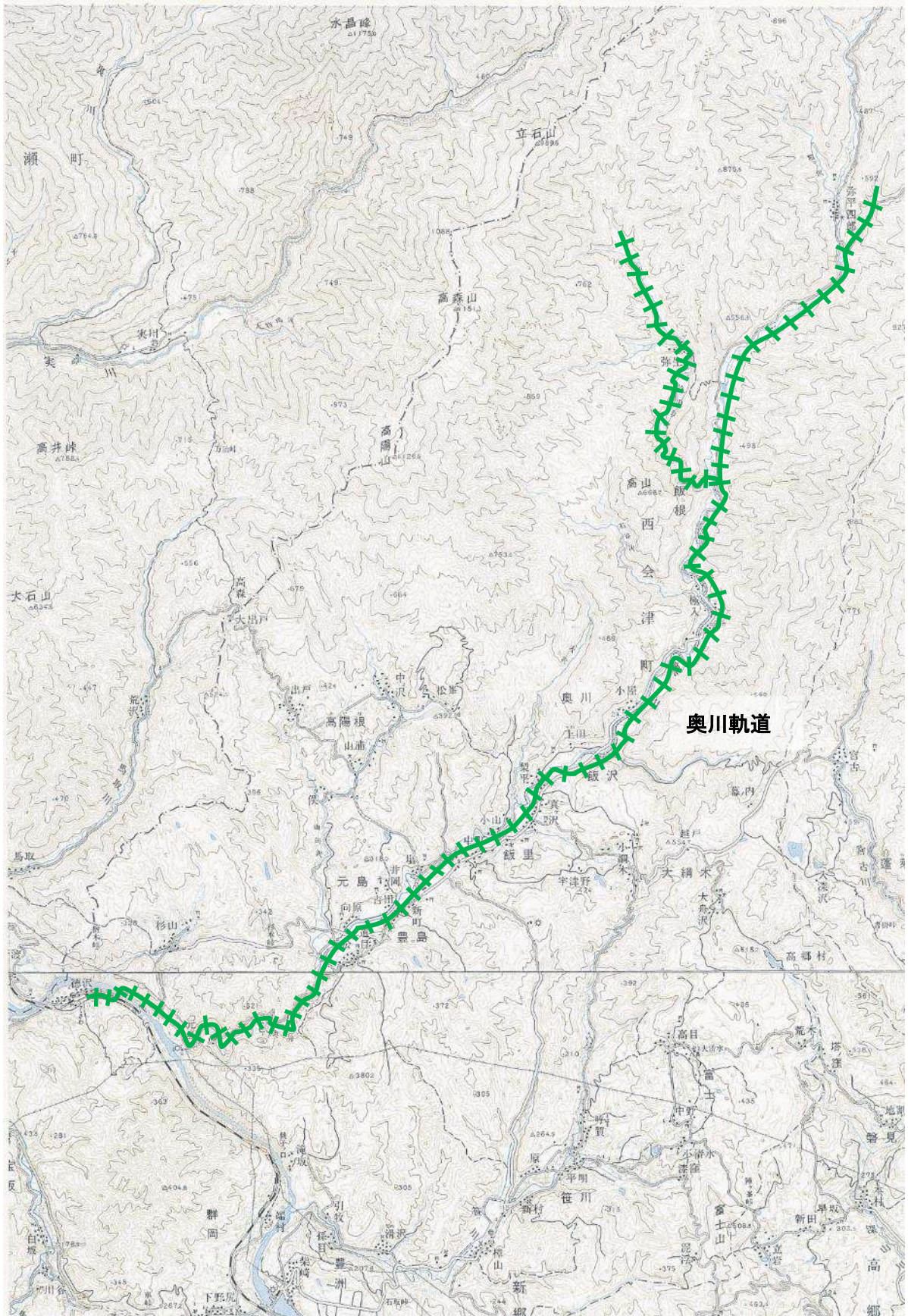
奥川軌道は、大正 3 年、岩越鉄道全通により開設された徳沢駅から奥川に沿って、飯豊山麓の弥平四郎集落東の角間沢まで約 20km を結ぶものであった。明治 45 年から計画が進み大正 7 年には幹線部分が完成している。林区署という国の機関(のちの営林署)が建設したもので、勾配は平均 1.5%程となった。その後何本かの枝線(石谷沢・久良谷沢・アツラ谷・小峯沢)が建設され、中でも極入村北から西側に延びる久良谷(倉谷)沢の弥生集落を抜ける軌道は、昭和 37 年に廃止となる最後まで活用された軌道であった。この軌道は本線よりは少し遅れて昭和 6 年に完成し、弥生集落を経て、鏡山登山道入口付近までのおよそ 4.5km に渡る枝線である。現在鏡山登山者用駐車場のある場所には 9 家族の住宅と学校や倉庫があった。この村は「上官行村」と呼ばれていた。住人の多くは、県外から働きに来た人であった。

久良谷沢奥の鏡山(1339m)やそれに連なる山々には、ブナの木が豊富である。ブナは用材としての価値は低いといわれるが、古くは木地椀の材料として利用されていた。この当時はアメリカで玩具の材料として需要が高く、多くは輸出用として伐り出されていた。その後、太平洋戦争中には” 軍用木材” としての伐り出しもあったといい、当時の昭和 18 年 5 月 22 日付けの新聞に掲載されている。「軍用木材として、樹齢 400～500 年、直径 2 尺余のブナ・朴の大木が、トロ屋さん 9 名と 4 頭の犬を以て出発、途中諏訪神社でお祓いを受けたのち日章旗を先頭に徳澤駅まで運ぶ」と多くの木材は極入集落北につくられた営林署の製材所に運ばれ、ある程度加工された。この製材所にも、ここで働く人やその家族が住み、1 つの村を造っていた。

この路線の途中にある弥生集落は、太平洋戦争後にできた開拓村で、上官行村から



奥川軌道跡



移った人もあったが多くは近くの弥平四郎村からの開拓移住者であった。村の人はトロッコを利用して、真ヶ沢公会堂で上映される映画を見に行ったこともあった。夏休みには子供たちがトロッコを押す作業を手伝うこともあり、そんな折、小学6年生の男の子が後ろから来たトロッコに挟まれ亡くなるという痛ましい事故が起こっている。

奥川村ではこのトロッコ輸送の利便性から“民間活用”を申し出、この結果、毎月6日間だけの利用が認められている。木材の輸送、薪炭の輸送に大きな威力を発揮し、販売は好調となり、これまで自給自足が主であった村の生活を大きく変えることになった。トロッコ輸送は昭和30年頃にはトラック輸送に奪われ、役割を終えたのであった。

玉石を積み上げた路盤跡は各所に残っているが、黒部峡谷のトロッコ列車の距離とほぼ同じ長さの軌道は崩落が進み、今では通行が困難となり忘れられようとしている。

(2)高陽山のブナ自然林

西会津町の北西部を占める奥川地域は、北に飯豊山がそびえ、西は標高1000mを超える山々が連なり、新潟県との県境をつくっている。飯豊山を源流とする奥川は、約20kmを流れ、阿賀川に合流する。この奥川兩岸の狭い谷部分に主な集落があり、生活の中心舞台となる。西側に連なる鏡山や高陽山などの標高600～1000m付近は、ブナやナラ・ホウなどの自然林が多くみられ、豊かな森林資源地帯となる。今でもブナの自然林が残り、一帯は80%がブナの自然林といわれる。ほとんどが国有林地帯であるが、麓の村々はここを大切な水源涵養地帯とし、伐採計画にも抵抗し保護してきた。

また、高陽山は奥川地域のシンボルとして親しまれ、かつて麓にある奥川小中学校では、4年生からの全校登山を秋の学校行事として昭和の初めから続けてきた。住民誰もが何回か登った経験を持つ“故郷の山”である。昭和13年には出征兵士の篤志金が小学校に送金され、これを基金に頂上に祠が建立されている。

現在は、毎年5月3日に山開きを行い、県内外からの大勢の登山者で賑わいを見せている。また、冬の山スキーやスノートレッキングを楽しむ人も見られる。

山間地帯にある奥川地域では、春は山菜、秋はきのここと豊かな山の恵みを受けてきた。毎年藩への貢納品として、ぜんまいやマツタケなどがあったとも記録されて

いる。住人は山の資源を活用して生活してきた。杉や桐、薪炭は大切な現金収入源であり、大切に育て護られてきた。特に軌道の建設によって木材や薪炭の輸送が容易となり、植林も盛んに行われるようになった。畑に桐の木が植えられたのもこの時期が多く、のちに桐特産地の1つに挙げられるようになった。山間地の木材の伐り出しは雪の降る前に行われ、雪解け近い春先に、軌道やトラック輸送の可能な場所まで人力で出された。それは「橇」による運搬であった。雪上に作られた橇道は急な坂や雪崩の起こる崖を抜ける道もあり、丸太を3~4本積んで運搬する極めて危険な作業であったが、女性たちも橇を引く作業に加わっていた。中学生くらいの男は橇を押す作業を手伝わされていた。これとは別に、自分の家の薪を運ぶ作業も同じ様にして行われていた。山奥の薪は、1年目に途中まで運び、翌年春に自分の家まで運ぶ2年越しの作業ともなった。橇も手作りで、主に花の木(かえで)が使われていた。



麓集落のぜんまい干し